

「Gastrointestinal TNM Cancer Staging by Endosonography」

edited by T. Lok Tio

札幌医科大学名誉教授・機器診断部

福 田 守 道

著者の Lok Tio 氏はオランダ、アムステルダム医療センターの消化器部門主任の Tytgat 教授と長年にわたり共同研究に従事してきた超音波内視鏡の専門家であり、ヨーロッパにおける先駆者の一人に数えられており、日本にも度々来日し知人も多い。

氏の研究の特徴はその豊富な検査症例数と徹底した研究態度および視野の広さにあり、人種偏見の少ない欧米の医学界において、十分な評価を得つつあるアジア系の著名な研究者である。

本書はその表題が明示するように、超音波内視鏡の紹介書ではなく、応用編とも言うべきものである。目的は超音波内視鏡法が消化器疾患に用いられ出した当初からの大きな命題、すなわち消化器悪性腫瘍の staging にある。わが国で用いられている消化器癌の病型分類は、胃癌取扱い規約をはじめとする消化器癌の取扱い規約に示されるように、内

視鏡所見および手術所見に立脚している。この方式は、WHO の支持する TNM 分類とは大きく相違する。実際に腫瘍の肉眼所見に基づいていたのでは、少なくとも消化器癌においては転移リンパ節の浸潤の有無、遠隔臓器転移の程度を把握することはできない。これに超音波内視鏡を併用して初めて TNM 分類を行うことができるというのが氏の主張であり、本書を著された本来の目的である。

対象は胃癌、食道癌、直腸および大腸癌、膵臓癌、十二指腸乳頭部癌、胆道癌を含み、その超音波内視鏡像による早期癌、再発癌、残存癌の評価の仕方を記述している。

わが国でなかなかこのような著作が出現しないのは、消化器癌の staging が完全に癌取扱い規約に立脚しているために、WHO-TNM 分類による見直しができないからではなかろうか。

今日胃癌の診断、特に早期癌の評

価の仕方について欧米と日本の医学界のそれとの間に意見の食い違いが表面化しているように思われる。いったい胃癌の集団検診の効果は実際にいかにほどなのだろうか、あるいはいわゆる早期胃癌はすべて真の早期胃癌なのであろうかなど、いくつかの素朴な質問に対する答えは、超音波内視鏡検査などの成績を通して TNM 分類による再評価が必要なのではなかろうかなどの疑問に襲われる。本書はこの問題に真っ正面から取り組んだ名著と言えよう。今日超音波内視鏡は日本、ヨーロッパ、北米、南米で多数の装置が稼働しはじめており、本書の与えるであろうインパクトは少なからぬものがあると思される。関係諸家の必読の書として推薦したい。

● Published by Igaku-Shoin Medical Publishers, Inc., New York, 216 pp. 231 figs. 1995 ¥22,400

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)